

ジェイムズ哲学における生成と信仰 ——経験の形成と展開の構造をめぐって——

文学研究科哲学専攻博士後期課程2年

藤坂 大佑

要旨

ウィリアム・ジェイムズは「根本的経験論」の方法に即しつつ、いかなる知性的作用による把握も、二次的な派生物としてしか見なされないような経験の根源的な在り方を示す。こうした存在論的な視点を軸とし、かつ「プラグマティズム」の理論を援用することで、多元的で動的なものとして示される「実在」をうまくあつかえるようにするために「考える」よりもまず「感じる」ことに重きを置く真理観が論じられることとなる。この両者の解釈を踏まえると、行動、認識、生が「連続的な繋がりによる漸進的な進行」として捉えられる経験プロセスの把握によって示される「生成」の概念、その中で「行動の傾向」を意味するものとしての「信仰」の概念が経験の記述のうえで中心的な座を占めることが把握される。以上を踏まえたうえで改めてジェイムズ哲学を捉え直すと、その全体像において示される経験領域の射程、更にはその生成プロセスの中で役割を果たす「信仰」の機能が、経験成立の根底的な問題となることが理解される。

キーワード

純粹経験、プラグマティズム、実在、超越的信仰、経験領野

はじめに

本稿は、ウィリアム・ジェイムズの哲学において述べられる純粹経験の理論に準じた主体の形成から、主体の経験の「方向づけ」の根源的な機能を果たすと考えられる「信仰」の概念について考察し、彼の哲学に通底する「生」と「信仰」の関連性を提示することを目的とする。

ジェイムズにおいて信仰に関する記述は、とりわけ『宗教的経験の諸相』において見られる。そこでは心理学的観点における身体反応としての反射作用と、宗教的な場において発生すると考えられる神秘的なエネルギーとの関連付けから信仰に対する心理学的分析が行われ

ており、一種の心理作用としての信仰が考察対象として扱われている。本稿においては、以上のようにして示される、宗教的な場でみられる信仰に内在する根源的な機能、つまり、生の本質的な方向付け（ないしは傾向）としての信仰の意味について、ジェイムズ哲学を通じて探っていく。

本稿の前半部（第一章、第二章）においては、ジェイムズ哲学の全体的な骨子を把握するために、ジェイムズの著書の内容に準じながら、その基礎的な理論構造を概観する。ジェイムズの死後、編纂・出版された論集『根本的経験論』の中では、「純粹経験」を一元的素材として構成される経験の在り方が示されており、『プラグマティズム』においては知性作用、概念化の及ぶ領域から充溢した、豊饒な「实在reality」についての視座から、「生」と「实在」との関わり方（認識論的な関係性）が示されている。こうした大枠についての理解が、本稿のジェイムズ哲学解釈の基軸となる。

以上を踏まえ、本稿の後半部（第三章、第四章）においては、その中で信仰の機能が具体的にどのように位置付けられるのかを見ていく。例えばウィリアム・コノリーは、独自の生成プロセスとして描かれるジェイムズ哲学の展開可能性を指摘し、ダヴィッド・ラプージャットは、そうした生成プロセスにおいては、信仰という概念によって根本的な導きの方向性が示されていることを指摘している。こうした両者の解釈を踏まえ、『宗教的経験の諸相』において論じられる信仰の在り方の一つとしての「超越的信仰」の議論と比較しつつ、ジェイムズ哲学において論じられる経験領野の射程と、その形成過程を考察する。

ジェイムズは、科学的ないしは知性的に理解可能な世界とは存在次元が違う領域に対する信仰としての超越的信仰の存在を認めている。しかし、繰り返し述べているとおり、こうした意味での信仰とは、最終的に、宗教的な意味における信仰とは別様の、潜在的な経験の方向性を特徴づけるような意味が含意されているものとして理解され得るのである。

1. 根本的経験論と純粹経験の世界について

まず、ジェイムズ哲学全体の要を成す「根本的経験論」から順に見てゆこう。ジェイムズは、経験一般が「純粹経験 (pure experience)」という一つの素材によって成り立っているという一元論的な考え方を前提に据える。純粹経験が基盤となって成立する認識関係について、ジェイムズは以下のように論じる。

もし、私たちが、世界には根本質料ないし物質、すなわちあらゆるものを構成する素材がただ一つだけ存在するという仮定から出発するならば、そしてこの素材を「純粹経験」と呼ぶとすれば、そのとき<知るということ>は、純粹経験の諸部分が結びうる特殊な種類の相互関係である、と容易に説明することができる。この関係自体が純粹経験の一部であって、この関係「項」の一方が知識の主体ないし担い手、つまり<知るもの>

なり、他方の関係項が〈知られる対象〉となるのである¹。

こうした認識関係においては、「意識」の実在性が否定される。何故なら、意識それ自体は、無時間的で、ただ時間の中で生じる諸々の出来事の一撃者でしかなく、時間の中においては、なんらの役割をも演じることがないと捉えられるためである。つまり、意識とは一つの経験における「内容」の論理的相関者でしかなく、この経験の特徴は、内容の認知が生じる、という事実を表わすものでしかない²。こうした意識の実在性の否定によって、ジェイムズは経験における内的二元性、つまり「自己の意識」と、「意識の内容」とに大別され、構成されるような経験の構造を否定するのである。この点に関してジェイムズは同様に、純粹経験の理論を用いながら次のように論じる。

一つの与えられた不可分な経験部分が、一方のいろんな仲間たちの文脈のなかに置かれると、〈ひとりの知る者〉の、心の一状態の、「意識」の役割を演ずることになるが、別の文脈のなかにおかれると、その同じ不可分な一片の経験が〈知られる事物〉の、客観的な「内容」の役割を演じることになる、と私は主張するのである。[……]そして、同一の経験断片が同時に両群において役割を演じるのであるから、それは同時に主観的でも客観的でもある、と言っていっこう差しつかえないわけである³。

例えば、机に向かって本を読んでいるとする。この際、自身の視野において知覚的に経験される本と、単なる物理的事物として存在する本は、共通した一つの実在であり、本を読んでいる自分の心と外部空間にそれぞれ別々の本が存在する訳ではない。それぞれの文脈において「自身の意識野」と「ある本」という役割を演じる一つの経験が基盤となっており、ここでジェイムズは「意識」と「内容」をそれぞれ「純粹経験の派生」として捉えることによって、経験における二元的構造を否定するのである。

このような基本的な特徴に基づき、純粹経験の要点を三橋は以下のようにまとめている。

それでは純粹経験とは具体的にはどのようなものであろうか。[……]第一に純粹経験論は経験が二次元的構造をもっていることを否定している。第二に純粹経験は時間的流れの上からみられた時はわれわれが最初にであう一つの事実である。第三に純粹経験の原理は経験に徹するという方法論的公準を持っている。その経験は具体的である。第四に、以上の帰結として純粹経験はわれわれの生の直接的流れそのものである⁴。

ここで示されている第一、第二の点は、これまで論じてきた性質に関するものである。これらに加えて、純粹経験は自身の経験の流れにおける原初的な事実であると同時に、自身の「生

の流れ」としても捉えられるものでもあることが、上記引用部で示されている。こうした性質を有する純粹経験の世界において重要なのは、第三の性質として挙げられている「経験に徹するという方法論的公準」としての側面である。経験の根本的な素材であり、直接的な生の流れとしても示される純粹経験とは、自身の経験に徹底的に依拠し、その本質を捉えるという方法によってこそ、把握されるのである。そして、この「自己の経験に徹底的に依拠する」という見方が、ジェイムズ哲学に一貫する立場を表明する「根本的経験論」として展開されることとなる。

その方法について具体的に確認してゆくこととしたい。まず、ジェイムズは根本的経験論を次のように定義する。

根本的であるためには、経験論は、直接的に経験されないいかなる要素をも、おのれの構造内に入れてはならないし、また、直接的に経験されるいかなる要素をも排除してはならない。このような哲学にとっては、経験と経験を結びつける関係それ自身が経験される関係でなければならない、およそ経験されるいかなる種類の関係も、体系のなかの他のいかなるものとも同じように、『実在的』とみなされなければならない⁵。

ジェイムズが「経験論」という語にあえて「根本的」という言葉を付したのは、パークリーやヒュームなどに代表される従来のイギリス経験論との区別を明確にするためである。経験論である以上、その根底にあるのは、それらと共通した経験論的地盤であるが、ジェイムズは、自身の論じる経験論は、従来の合理論と経験論との対立を解消させるものであるとしてその独自性を主張する。ジェイムズは、従来のイギリス経験論においては、事物が「個々ばらばら loose and separate」で「連結のしようがない no manner of connection」ものとして認識され、経験同士の接続的關係が無視される傾向にあったと述べる。これによって生じるのが、合理論的思想との対立である。

このような世界像の当然の結果として、統一化をはたす超越論的な能動者、実体、知的な範疇および能力、あるいは自己などを加えることで経験論のもつ結合力の欠如を修正しようとする合理論の努力が現れた。しかしながら、もし経験論が、根本的でありさえしたら、[……]そんな人為的な修正など必要とするにはいたらなかったであろう。⁶

上述のように、ジェイムズは経験に対して根本的な態度をとることによって、経験同士の接続的關係それ自体を経験的なものとして捉え、超越的なものの働きによって経験の成立を説明しようとする合理論的な考えを退けるのである。

この文脈で論じられる経験同士の接続的關係とはいかなるものであろうか。ジェイムズ

は、経験同士の関係には、それぞれ次のような親密さintimateの度合いがあり、以下のようにして、その度合いの差によって関係性が理解されるとする。

| | |
|-------|---|
| (親密度) | |
| ↑高 | <ul style="list-style-type: none"> ・自己の内で直接的に意識される関係（記憶、目的、努力、達成など） ・活動関係（変化、傾向、抵抗、因果秩序など） ・類似・差異 ・空間的近接・距離 ・時間間隔（同時性） |
| ↓低 | <ul style="list-style-type: none"> ・「共に」ある |

このような経験同士の関係性は、「共にwith」、「近くにnear」、「何故ならfor」、「私のmy」等といったように、文法上の不変化詞に依存してきたとジェイムズは述べる。どのような言葉で表される関係性でも、それぞれなりの程度の統一性を持っている。こうした様々な関係性によって構成される経験の宇宙は混沌としたものであり、単一な型の連結があらゆる経験を貫いている、ということではないのである。

経験同士の関係性において、最もその新密度の度合いが低いのが単に「共にある」という関係である。ジェイムズは、これにより、従来の経験論は事物同士の分離を強調するようになったと主張したうえで、次のように述べる。

経験の総体のうちのある部分と他の部分とのあいだの不完全な親密さ、単に共にあるwithnessというだけの関係は、普通の経験論が、その関係を不当に無視しがちな合理論に反対して過当に強調する事実である。根本的経験論は、これに反して、統一および断絶の両者に対して公平である。それは、いずれをも幻影だとみなす理由を知らないのである。根本的経験論は、両者いずれにもそれ相当の一定範囲の記述を割り当て、そこには時の経過につれて統一を拡大してゆくような現実的な力が働いているようにみえるとする見方に、同意するのである⁸。

統一も断絶も、根本的経験論においては、経験同士の関係性の程度の差異として把握される。経験論者も合理論者も、経験同士の接続的關係を不当に扱い、ある視点でその見方を偏重させてしまったために両者の対立が生じたのである。これに対し、ジェイムズは次のように指摘する。

二つの単純な反省をしてみれば、私たちは、このようなあらゆる不自然ないとなみから

救われることができるのである。第一は、接続と分離はとにかく対等の現象であって、私たちが経験を額面どおりにうけとるなら、等しく実在的であるとみなされねばならぬ、という反省であり、第二は、もし私たちが、事物が連続的につながったものとして与えられているのに、それを現実には分離したものとみなすべきだと言いはり、統合が必要とあれば、超越論的な原理を呪い出して、私たちの想定した分離性を克服しようなどとするのなら、そのときには、私たちはそれとは逆の行動をとる覚悟をすべきだという反省である⁹。

これは、不統合な経験を真に実在的なものたらしめようとするのなら、経験を外部から接続させようとするのではなく、経験内部における不統合さの更に高次の原理に訴えるべきである、という主張である。その点を、ジェイムズは根本的経験論の方法によって示すことを試みたのである。

以上のジェイムズの理論においては、経験同士の接続的な関係と共に、経験の直接性を示す経験の「連続性」についても、観念論者が論じるような、絶対者の外的な働きかけによって経験同士の接続が可能になるものとしてではなく、これまで論じた「経験はそれ自体において既に連続的である」という態度に基づいて理解される。この点に関して、ジェイムズは「経験のあつみや具体性や、個性はすべて、その直接的なまだ名前のはっきりしない段階の中に存するのである。ベルクソン教授は、この段階の豊かさと、我々の概念がそれをとらえるのには適していないという事実とに、かくも懸命に我々の注意をひいているのである」¹⁰と述べる。ここでベルクソンの名が挙げられるのは、ジェイムズが述べる「経験の連続性」の特徴がベルクソンの「純粹持続」の概念から着想を得ていることによる。

ベルクソンは、数量化された時間によっては示し得ない、意識内で絶えず生じている連続的な質的变化をその本来の姿、つまり、意識が体験している時間そのものを示す「持続」という在り方を提唱した。ジェイムズが述べる連続的な経験も、ベルクソンが述べる「持続」も、共に概念化不可能な経験ないしは意識本来の姿として示されるのである。

連続性のまっただ中において、我々の経験は、変化としてあらわれる。完全な明るさにおいては、我々は「そうだ。これが私のいいたいことだ」という。薄明においては、「いや、これはまだ完全な意味ではない。もっと何かがつけ加わらなくてはならない」という。感覚のあらゆるクレッシェンドにおいて、すべての思いおこそうとする努力において、欲望の満足にむかうすべての過程において、このお互いに関係しあい、一体となっている、空虚と充満の継起が、現象の本質なのである。¹¹

連続性を有する経験が「豊かである」と言われる理由は、経験が原子的なものの集合体と

してではなく、関係性の只中において様々な部分と相互に浸透し合う形において把握されるためである。また、「ことがらの本質は、いつも変わらない——あるものがあるものと分かちがたくむすびついている。実在を全くすてて、観念論的な体系を採用するのでないかぎり、同一者をその他者からきりはなすことはできない。ただ一つ特定の事例において直接に与えられるものは、常にプールされたものであり、その間に脈絡のあるものであり暗い点ももたず無知な点ももたないのである」¹²と述べられる通り、経験は常にある脈絡の内で把握され得るものである。こうした「経験の連続性」についての考え方においては、感覚の働きを自明のものとして捉えるのではなく、自己の感覚によって捉えられた事物が、自己の経験の流れの内においていかなる働きによって真と判断されるのか、というその具体的な機能の把握が経験の展開の仕方を見定めるうえでの要を成す。この点について把握するためには、感覚に依拠する経験の展開、つまり、ジェイムズにとって根本的な拠り所とされていた自己の「生の流れ」の在り方と、同じような視点で論じられる「実在reality」との関連性を捉える必要がある。

2. プラグマティズムにおける実在の捉え方——ベルクソンの解釈を基に——

前節で概観した根本的経験論の基本的な理論構造や純粹経験による世界構造を軸として、ジェイムズ哲学の認識論はプラグマティズムの理論に準じながら展開されることとなる。本節においてはこの点について、ジェイムズ哲学の認識論的基盤となる「実在reality」の捉え方と共に、ベルクソンのプラグマティズム解釈に基づきながら見てゆくこととしたい。

ジェイムズは、「およそ一つの思想の意義を明らかにするには、その思想がいかなる行為を生み出すに適しているかを決定しさえすればよい。その行為こそわれわれにとってはその思想の唯一の意義である」¹³というパースが主張した方法をもとにして、プラグマティズムを、原理や範疇、および仮想的な必然性に反し、帰結や事実に向かう態度であると主張する¹⁴。こうしたジェイムズのプラグマティストとしての「態度」とは、単に抽象的な理論を排し、実証的な事実のみ目を向けようとする態度を指しているのではない。前節において述べられた、純粹経験の理論に基づいて示された「直接的な生の流れ」を捉えようとする視座から論じられる経験の在り方と同様に、知性作用によっては捉え得ないものを捉えようとする視点から、「動的なものとしての実在」との関わり方にこそ注視すべきである、という態度を指しているのである。この点を通じて、経験の成立という視座から更にそれを含んだ「実在」との関わりについての視座へと領域が拡大されてゆく次第が、プラグマティズムの認識論的構造の内に含意されていることが理解される。

具体的に見てゆこう。まず、ベルクソンはジェイムズのプラグマティズムの真理観と実在観の関係性について以下のように述べている。

実在は流れる。私たちは実在と共に流れる。そして私たちは、揺れ動く実在のなかで私
たちを導き、その実在に対する手がかりを私たちに与え、行動するための最良の条件に
私たちを置くあらゆる言明を、真と呼ぶのである。こうした真理観（プラグマティズム
における真理観）と伝統的な真理観との違いは明らかであろう[……]彼によれば真な
るものとは、これまでに存在したものと現に存在するものを模写するものではない。真
なるものはこれから存在するものを予告する、というよりはむしろ今まさに存在しよう
とするものに対する私たちの行動を準備する。哲学は自然の傾きとして真理が後ろ向き
になることを望むのだが、ジェイズにとって真理は前方を向いている¹⁵。

ベルクソンは、一般的に哲学における真理が「発見」であるのに対し、プラグマティズムの
真理は「発明」であるという点に独自性があると考え。つまり、真理とは、普遍的なもの
として捉えられるものなのではなく、常に変化しつつあるものとしての実在を基盤とし、そ
れをうまく扱えるようにするために生み出されるという見方から、プラグマティズムの特質
を見出すのである。

また、ジェイズの実在観と真理観の関連性について、ベルクソンは、「実在は一つの全
体を構成するものではなく、多元的で動的であり、互いに交差するいくつもの流れからなっ
ている。そうした流れのいずれかとの接触から生まれる真理——考えられるより前に感じら
れる真理——は、単に考えられるだけの真理よりも実在そのものをよく捉え、そしてそれ
を貯えることができるのである」¹⁶とも述べており、プラグマティズムにおける真理形成は、
その根源となる根本的経験論において述べられるような独自の实在観に深く根付いているた
め、プラグマティズムに対する批判が向けられるのであれば、むしろその点（根本的経験論
の内示されるような实在観）に対してであるとも論じている¹⁷。

では、こうした形で捉えられる「実在」の捉え方と、経験の構造基盤として論じられる「生
の流れ」としての主体の在り方の間にはいかなる関係性があるのだろうか。ジェイズは『根
本的経験論』において、経験を記述するうえで「経験を額面通りに受けとる」ことを基本的
態度として示し、こうした態度に準じつつ、実際の経験に根差しながらその構成原理につ
いて述べることを試みた。これまで論じてきたジェイズのプラグマティズムの考え方は、そ
うした経験の構成原理と、実際の経験の間において理論的な紐帯としての役割を果たすもの
であると思われる。この点は、プラグマティズムにおいても根本的経験論と同様に、経験を「額
面どおり」に受け取る態度に重点が置かれていることから確認できる。我々の「行為」と世
界の在り方についてジェイズが述べた次の文章において、その点が表現されている。

「われわれの行為、われわれの転換の場、そこでみずからわれわれ自身を作りそして生長
して行くのであるから、それはわれわれに最も近い世界の部分なのである。この部分につ
いてこそわれわれの知識は最もよく通じており完全なのである。なぜわれわれはそれを額面ど

おりに受け取ってはならないのか？」¹⁸。

上述のような立場から、ジェイムズは、プラグマティズムは改善論に傾かざるを得ないと述べる。それは一種の規範に則りつつ定立された理想的な世界観を導くものとしての改善論ではなく、根本的に「多元的」かつ「非合理的」な世界の一部として示される、我々の「不十分な経験」の方向性を指し示すための理論として論じられるものである。ジェイムズのプラグマティズムが持つ改善論的傾向は、一見すると形而上学的な楽観論に堕してしまう危険性があるようにも思われる。あくまでそれは「経験の方向づけ」という大枠を示すものであり、「経験的事実をあるがままに受け取る」という根本的経験論によって示された立場から唱えられた、経験の展開の方向を基礎づける主張として捉えられるべきなのである。

こうした特徴を有するジェイムズ哲学においては、理論が前提とされるのではなく、我々の経験が第一に存在するものとして定位され、その経験の方向性を定める導き役としての真理が想定される。このプラグマティズムの理論は、単に個人の生を尊重するような、倫理的な理論として示されるのではなく、ベルクソンが指摘するように、捉え難いものとしての「実在」をうまくあつかえるようにするために、「考える」よりもまず「感じる」ことに重きを置く真理論として、我々に示される。そうした真理観とは、ジェイムズ哲学においてはまさに前節で論じられた純粹経験の理論によって構成される経験と、本節で論じられた「多元的で動的な実在」というふたつの観点を徹底することによって導かれる帰結として把握されるものである。ジェイムズ哲学におけるプラグマティズムの解釈は、それに通底する経験・実在の把握と切っても切れない関係の内に存しているのである。

3. 内的生と実在観の展開——「生成」と「信仰」——

これまで論じてきた内容をまとめよう。まず、根本的経験論においては「何かになりつつあるもの」としてしか語り得ない生の在り方を肯定する態度をとることで、生本来のカオス的な在り方が経験の記述をするうえでの前提として示された。そしてプラグマティズムにおける「有用性から事物の真理性を見て取る」という態度においても、ほぼ同じように「多元的で動的な実在」をうまく扱えるようにするための主張が展開されたことを確認した。

このような生や実在に関する根底的なヴィジョンから展開されるジェイムズの思想は、最終的に「多元的宇宙」という世界観に結実することとなる。こうしたジェイムズ哲学の全体像を踏まえ、ウィリアム・コノリーは、多元的宇宙の思想の根幹に「生成becoming」概念の存在を見て取り、ジェイムズ哲学における経験の基本的な特徴について以下のように述べている。

「われわれの経験を特徴づけるのは持続を置き換えることなく変形するフィードバックと変容であり、これは既存の軌跡を新しい方向へとねじ曲げる」¹⁹。

コノリーの主張によると、ジェイムズ哲学における目的論的なものの排除の根幹には、「つ

くられつつある事物」としての「生成」概念を重視する見方がある。この「生成」概念が、世界とは完璧な姿で必然的に生長するのではなく、部分部分の寄与によって少しずつ生長するものである、とするジェイムズの世界観の基軸となっているのである²⁰。

こうした生成的な世界の構成について論じるのは、経験を直接的な生の流れとして捉えることにより可能となる。この点を踏まえコノリーは、「ゆえに経験とは相互に接続したものであり、かつ、変容を通じて移り変わるような接続なのである」²¹と述べ、その生成しつつあるものとしての経験の在り方をジェイムズ哲学の基本的な特徴として捉える²²。

他方、ドゥルーズの弟子でジェイムズ研究者でもあるダヴィッド・ラプージャッドはジェイムズ哲学（主にプラグマティズム）の本質に「信croyance / 信頼confiance」についての考え方を捉え取り、その定義について以下のように論じる。

信croyanceという語の第一の意味において、ジェイムズは、慣習に基づいて既に形成された確固たる諸々の信仰を示している。ジェイムズにとってとりわけ重要である第二の意味においては、信仰は常に『行動の傾向』として規定される。つまり、行動を喚起するのはもはや習慣ではなく、また、その結果は全く保障されない。何が我々を行動へと導くのか？それは信頼、あるいはジェイムズが信仰foiと呼ぶものである²³。

ラプージャッドの主張をまとめると、ジェイムズが主張する「プラグマティズム」の思想は、行動・認識・生が連続的な繋がりによる漸進的な進行として、すなわち、すべての部分がその「周辺」によって接続されるというやり方で進められる「徘徊的な」プロセスとして規定されている²⁴。ラプージャッド自身、ジェイムズの哲学にとって本質的なものは、指標から指標へと進むような、部分的で不完全なプロセスを巡るものであり、「ひとつの全体」という考え方は、ジェイムズにも見受けられるがあくまでも二次的な地平に過ぎないと述べており、全体のシステムを示すことよりも、生成途上の経験のプロセスを示すことが、その根本的な問いとされていることを指摘している²⁵。ラプージャッドによると、この経験の生成プロセスの要にあるものこそ、「信じることは、あるひとつの出来事を『現実のもの』として解釈することinterpréterである。すなわち、諸記号signesが意味を持つsignifierようにさせることである。この意味において、信仰とはまさに『現実の意味』である。現実のものとして信じられていることは、現実のものとして解釈される」²⁶と述べられるところの「信仰」の作用なのである。内的生の観点、およびプラグマティズムの实在観から示されるジェイムズ哲学の根源的な在り方の展開を通じて、ラプージャッドは主体の「信仰」から「現実の意味」を生成する過程に、現実経験における意義を見出す可能性を提示するのである。

また、ラプージャッドは他のジェイムズ論において、純粹経験論を「曖昧な一元論vague monisme」と称し得るような、多数の「道筋」を包含した一元的な観点によって捉えられた

ものとしているが²⁷、こうした純粹経験によって成立する経験は、第一節で論じたような基本的な特質に加え、ジェイムズ自身が「直接理解把握された限りでの宇宙は、経験を越えたところから外生的に物事を結びつけるような支えを何ら必要としない。そうではなくて、宇宙は、それ自体において、一つの連結された、あるいは連続的な構造を有するのである」²⁸と論じているように、個別的経験の成立のみならず、宇宙全体の成立に対しても連続的な構造を有するものとして示される。

ラプージャッドやコノリー、あるいは前節で述べたベルクソンの解釈を踏まえると、全体的・包括的な世界観の把握よりも、経験プロセス自体の把握から、宇宙とのつながりについて解釈する方法がジェイムズ哲学においては肝要であり、かつ論点になると言えるであろう。そのプロセスの生成過程において、ジェイムズ哲学では意味の生成の役割を果たす「信仰」の意義が、ますますその中心的な座を占めることとなるのである。

また、コノリーの「日常生活に何かしらの宗教的感情が含まれていなければ、大多数の人間はうまくやっていくことができないと彼は考えていた。ジェイムズをして多元主義哲学を展開させた最大の動機は、神的なものの経験の余地を確保しようとする所にあった」²⁹という主張から、ラプージャッドが主張するようなジェイムズ哲学における「信仰」が有する意義について考えることもできるであろう。コノリーは、上述の箇所において、ジェイムズ哲学が有する「経験的事実に忠実である」という基本的な態度から、経験が含むあらゆる要素を個人の信仰の発端となるものとして捉えており、ベルクソンとは別の仕方であれ、経験に潜在する実在の豊饒さについて指摘している。またそれが「信仰」の要素になりうる、という点で、コノリーはジェイムズの多元主義的哲学を、政治的多元主義へと橋渡しする理論と見なしている³⁰。

しかし、ジェイムズ哲学全体において示される信仰の在り方とは、こうした政治的な場面において意義を見出すことが出来るだけでなく、個人の内奥に潜在する、より強固な意味での親密性を有した、経験全体を特徴づけるものとしても提示されることとなる。次節で詳述するように、ジェイムズは『宗教的経験の諸相』において、哲学がその上に接ぎ木されるような根源的な信仰の形としての「超越的信仰 the over-beliefs」の存在について論じているが³¹、こうしたジェイムズ哲学における「信仰」とは、現実的な経験に根差しつつも、その原型として「常に何かになりつつあるもの」である経験の展開可能性を押し広げるための重要な役割を担っていると考えられる。こうした信仰の問題と多元主義的な思想とのつながりについて、コノリーは次のように論じている。

多元的宇宙の哲学を鼓舞するのは、なによりもまず、人間性と連続的であるような小文字の神の希求である。こうした可能性を抹消する哲学は、彼の好みと相容れなかった。それというのも、多くの文化が歴史上のそれぞれ異なった時代にありながら有してきた

崇高なものの経験を、そうした哲学は、必要でない限り捨象してしまうからである。機械論的唯物論が神の可能性自体を排除している中で、たとえ一元論の神は二元論のそれとは異なっているにせよ、ジェイムズの多元的宇宙の哲学は、限定された、愛する神の場を確保するものであった。³²

知性主義的な包括的把握を排するジェイムズ哲学においては、その考察の対象となるのはもっぱら個人の経験であるため、その視座から語られるそれぞれの宇宙間の生成は、個人の経験的事実を踏まえた、限られた要素内で築き上げられることとなる。それ故ジェイムズは、合理主義的に世界の構成を司る「神」なるものに対して、個人の経験において信仰の対象であるに値する「親密なもの」としての「有限な神」についての信仰を重要視する。このような宗教的なものに対する信仰に関する主張も含め、ジェイムズの哲学は現実経験における有用性に重点を置くプラグマティックな思想としてまとめられてしまうことが度々あるが、本稿を通じて論じてきたジェイムズ哲学の根幹を成す生成変化の理論を捉え損ねてしまっは、その十全な展開可能性を見出すことは不可能であると思われる。

4. 『宗教的経験の諸相』における超越的信仰と経験領域

以上、ジェイムズ哲学の大枠を概観し、その中で独自の生成プロセスとして示される経験の在り方と、その展開法について考察した。前節においてジェイムズによる「超越的信仰」について言及したが、この概念こそ、ラプージャッドやコノリーが指摘するような、経験の生成プロセスにおいて重要な役割を担うと考えられるため、本節でその具体的な内容を論じてゆくこととしたい。

『宗教的経験の諸相』は、種々の宗教的経験の分析に基づいて展開されている。ジェイムズはさまざまな事例を挙げながら宗教的事柄に関する分析を行っているが、事例全体に共通する信仰の特質について、伊藤は以下のようにまとめている。

- ①目に見える世界はよりスピリチュアルな宇宙の一部であり、この世界はその主要な意義をそこから得ている。
- ②そのより高い宇宙との一体化ないし調和こそが、われわれの真なる目的である。
- ③われわれの業が真になされるのは、その祈り、あるいは、高い宇宙からくるスピリット——そのスピリットが「神」であれ「法則」であれ——との内的な交流においてであり、そのスピリットからエネルギーが流入することで、この現象的世界のなかに、心理的ないし物質的な効果が生み出されるのである。³³

伊藤は、信仰を通じて「宇宙との内的交流の経験」に至るということが、宗教的信仰の本質

的な部分を占めており、種々の宗教経験の分析結果から、それらを明白な事実として確立することが『宗教的経験の諸相』の軸を成していると言及する。つまり、ジェイムズによる宗教経験についての分析は、諸宗教の教義や修行などに関する具体的な内実の解明ということよりも、経験における「宗教的なもの」の果たす役割とそれが人間に与える影響に関する考察を通じて経験領野の拡大を図ることに基づいていると言えるだろう。神秘体験などの宗教的場においてみられる独特の経験は、特殊な傾向を有する経験の具体的な一様相として見て取ることが出来るのである。

前述のとおり、『宗教的経験の諸相』におけるジェイムズの分析の基本的なスタンスは、広義的には、ある神秘的な効力と個人的経験とのあいだでの繋がりから、それが実際に経験にいかなる影響を与えるか、という実際的な結果を現象の分析を通じて把握しようとする試みに基づくものである。そうした宗教的経験の分析から、人間の心理的メカニズムについての考察を行う心理学的な側面と、個人的経験から得られた宗教的事柄に基づく真理観をいかにして擁護し得るか、といった哲学的な側面を有して思想が展開される。個人的経験における真理観の形成と経験領野の射程を、特に後者の側面に基づく宗教的経験に関するジェイムズの記述を軸として考察することで、これまで論じてきた純粹経験の理論とプラグマティズムの理論の関係性がより明確になるだろう。

先に挙げた『宗教的経験の諸相』の結論部において、ジェイムズは以下のようにも論じている。

そこで私は一つの仮説としてこう提唱したい。すなわち、私たちが宗教的経験において結ばれていると感ずる「より以上のもの」は、向こう側では何であろうとも、そのこちら側では、私たちの意識的生活の潜在意識的な連続である、という仮説である。このように承認されている心理学的事実を私たちの基礎として出発するならば、私たちは普通の神学の欠いている「科学」との繋がりを保つことができるように思われる。同時に、宗教的人間は外的な力によって動かされているという神学者の主張も支持されることになる。³⁴

宗教的な経験は、個人的経験の内においては「より高いものとの合一、ないしは調和」ということを本質的に有しており、これを通じて神秘主義的や回心の恍惚状態といった形で具体性を帯びながら展開されてゆく。ここで述べられる「より高いものとの合一、ないしは調和」こそが「超越的信仰」の為す役割として捉えられる。ジェイムズ自身、「私たちの存在のはるかかなたにある限界は、感覚的な、たんに『理解できる』世界とはまったくちがった存在次元に食い込んでいる、と私は思う。それは神秘的領域と名付けてもよいし、自然的領域と名付けても構わない」³⁵と述べているが、ここでいわれる、「たんに『理解できる』世界」こそ、

ジェイムズが忌避していた知性主義的に把握された世界であり、そこから充溢する存在領域こそが、コノリーの言う「神的なものの経験の余地」に関する記述であると考えられる。

こうした『宗教的経験の諸相』において具体的に論じられる経験領野の射程に関して、ジャン・ヴァールは次のように指摘している。

しかしジェイムズが「宗教的経験の諸相」について語る時、そこには、経験と言う語についての、はるかに大きく、また重大な拡張が見られる。実際、ジェイムズは、経験とか体験とかいう語の古い用法に立ち戻っている。彼によれば、大神秘家、宗教人は、われわれの日常の経験を超える何物かについて体験するという。実験や科学的経験が決して適用され得ない広大な領域、それも一つにとどまらず、むしろいくつかの現実を構成する広大な領域が存在するというのである³⁶。

いわゆる神秘家・宗教家と呼ばれる人達が経験する神的なものについての経験こそ、一般的に用いられる「経験」という概念が含むものを超越した経験であるとヴァールは指摘する。つまり、こうした経験に焦点を当て、その内在的な傾向としての信仰の機能を見出そうとすると、経験領野が拡張された形で見出される可能性が開かれるのである。ジェイムズが宗教的経験の内に見出そうとしたこととは、通常的な経験では捉え得ない、経験領域の広大さであり、それは単に、素朴な経験の擁護に留まるものではない。繰り返し論じているとおり、ジェイムズの哲学は「純粹経験」を軸とする存在論的側面と「プラグマティズム」を軸とする認識論・真理論的な側面を有するのであるが、これらの理論が、本節で論じた経験領域の問題を基盤に据えているとすれば、それらは最終的に、広い意味での人間経験の新しい見地を見出そうとする試みにおいて、段階的に結実した理論であると言えるのではないだろうか。心理学・宗教学・哲学と研究領域自体が様々な方向に分岐しているジェイムズ哲学をひとくくりに考えることは容易には為し得ないが、それらの理論を別個に取り上げ、そこから哲学的意義を見出そうとする試みにおいては、本稿でその全体像の把握を試みたようなジェイムズ哲学の基盤を成している「経験」の射程を捉えるのは困難であるように思われる。

おわりに

心理学研究によって開始されたジェイムズ思想の展開は、宗教学、プラグマティズム等、様々な形で発展を遂げた。そのため、ジェイムズの立場は「心理学者」、「宗教学者」、「プラグマティスト」と言ったように、様々な名称で表すことができるだろう。しかしそれらは共通して、多様な経験の展開の基盤となる「生」を根本的な問題に据えた、「生の哲学者」としてのジェイムズ思想から生まれたものであると考えられる。

第一節で論じた通り、ジェイムズは「直接的な生の流れ」を自身の経験論的思想において

絶対的な根拠としていた。よってジェイムズの哲学における主要な目的のひとつは、本稿における目的としても据えられた「個人の生の展開をいかにして語り得るか」という点に存していたと考えられる。

先述のとおり、ジェイムズの思想展開の結実した形として、最晩年の構想として多元的宇宙という世界観が論じられることとなる。多元的宇宙の考え方とは、最終的には我々の精神を一つの統合的な精神への複合することを目的とし、共存的な世界を構成しようとする形而上学的な理論である。しかし、『根本的経験論』や『プラグマティズム』において特殊的な経験における真理性を重視した思想が最終的に一つの形而上学的な体系へと集約されるとするのは、一見すると本末転倒であるようにも思われる。

しかし、そうしたジェイムズの構想に据えられているのは、経験を外部からの力による統合的作用によって説明する際に据えられる様な絶対的な観念ではなく、あくまで個人的な経験における目的、究極的な理念として想定される、「有限的な神」である。それは、万物を司るような「無限的な神」のように、自身の経験から「よそよそしいforeign」と感じられる神では無い。つまり、ジェイムズが論じる一元論的な観念とは、言わば一般的な意味で信仰の対象となりうるような神のように、自分自身の生の肯定性として存在するものとして論じられている。

こうした理念を基にして考えられる「多元的宇宙」は、ジェイムズの思想の体系としては「根本的経験論」が展開した世界観として述べられることとなる。しかしそれは、上記のような「有限な神」と我々が「親しさ」を持ち、そして「宇宙の自己表現」としての活動を成すことが経験の目的として据えられるため、ジェイムズ自身が否定しているように、自身の経験における「親しさ」を欠いてしまうような論理的厳密性によって保障されるものではない。つまりそれはある種の倫理観として受け取られるべきであるような考え方である。実際、こうしたジェイムズの倫理観が、彼の経験論の意義のひとつを示しているとも考えられる。

しかし、ジェイムズの哲学をこうした目的論的に収斂されるものだと想定すると、『根本的経験論』において論じられた、特殊的経験において「生」を如何にして語れるかという基盤として据えられた問いは、最終的に「多元的宇宙」の世界観を論じるための道具立てとされてしまい、その本来の目的がすり替えられてしまうのではないだろうか。ジェイムズの思想に対して忠実な態度で、その全体像を論じるのであるならば、それを最終的に「多元的宇宙」へと繋ぎ、その独自の倫理観の意義を見出すことが正しい解釈であろう。しかし、「根本的経験論」から「多元的宇宙」へと繋げようとするある種の真理観は、あくまで「根本的経験論」に基づいて展開される経験によって見出されるヴィジョンの内の一つに過ぎず、ベルクソンや西田幾多郎を始めとした、ジェイムズと同様の本質的な「生の流れ」を根拠として展開された思想が存しているように、ジェイムズの思想においても、より多面的なヴィジョンを見出せる余地がまだ存しているのではないだろうか。本稿で示した個の経験領域の射程

と潜在性に関する問題から、新たな問いを投げかけることもジェイムズ哲学の意義を見出す
うえでは重要な課題であると思われる。

¹ William James, *Essays in Radical Empiricism*, Longmans, Green, and Co., New York, 1912, (abbr. *ERE*), p.4. (邦訳: ジェイムズ、『根本的経験論』、梶田啓三郎・加藤茂訳、白水社 (イデー選書)、1998年、17頁)

² *Ibid.*, pp.5-6. (同上、18頁)

³ *Ibid.*, pp.9-10. (同上、21頁)

⁴ 三橋浩『ジェイムズ経験論の諸問題』、法律文化社、1973年、85頁。

⁵ *ERE*, p.42. (梶田・加藤訳、46頁。傍点原文)

⁶ *Ibid.*, pp.43-44. (同上、47頁。傍点原文)

⁷ *Ibid.*, pp.44-45. (同上、47～48頁)

⁸ *Ibid.*, p.47. (同上、49頁。傍点原文)

⁹ *Ibid.*, p.51. (同上、52～53頁)

¹⁰ William James, *A Pluralistic Universe*, Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts and London, 1977, (abbr. *PU*), p.127. (吉田夏彦訳『ウィリアム・ジェイムズ著作集6 多元的宇宙』、日本教文社、1961年、212～213頁)

¹¹ *Ibid.*, p.128. (同上、215頁)

¹² *Ibid.*, pp.128-129. (同上、216～217頁)

¹³ William James, *Pragmatism: A New Name for Some Old Ways of Thinking*, Longmans, Green, and Co., New York, 1910, (abbr. *Prag.*), p.46. (梶田啓三郎訳『プラグマティズム』、岩波書店<岩波文庫>、1957年、52頁)

¹⁴ *Ibid.*, pp.54-55. (同上、62頁)

¹⁵ Henri Bergson, *La pensée et le mouvant : essais et conférences*, Presses Universitaires de France, pp.246-247. (原章二訳『思考と動き』、平凡社<平凡社ライブラリー>、2013年、339頁)。カギ括弧内は引用者による補足。

¹⁶ *Ibid.*, pp.250-251. (同上、344頁)

¹⁷ 『根本的経験論』において論じられる「実在 reality」とは可感的なものとして捉えられており、経験の連続性が実在性を捉える一つの要因として捉えられる。他方ベルクソンにおいては生命の本質を持続性の内に捉えており、直観 intuition によってその本質を見極める態度を取る。「実在」と「経験」を巡る両者の捉え方の相違については、三橋浩『ジェイムズ経験論の周辺』を参照。

¹⁸ *Prag.*, p.287. (梶田訳、287～288頁)

¹⁹ William E. Connolly, *Pluralism*, Duke University Press, Durham and London, 2005, p.75. (杉田敦、

- 鷗飼健史、乙部延剛、五野井郁夫訳『プルーラリズム』、岩波書店、2008年、127頁)
- ²⁰ *Prag*, p.290. (榎田訳、290頁)
- ²¹ Connolly, *op. cit.*, p.75. (杉田、鷗飼、乙部、五野井訳、127～128頁)
- ²² こうしたジェイムズ解釈を踏まえ、グレゴリー・フラックスマンは、コノリーを「プロセスの哲学者」の系譜にジェイムズを位置付けた哲学者の一人であると指摘している (Gregory Flaxman “A More Radical Empiricism” *Deleuze and Pragmatism*. Eds. Sean Bowden, Simone Bignall and Paul Patton, Routledge, New York, 2014, pp.55-72.)。
- ²³ David Lapoujade, *William James, Empirisme et pragmatisme*, Le Seuil, 2007, pp.105-106.
- ²⁴ ダヴィッド・ラプージャッド「ルーザーたちの映画 ドゥルーズ、アメリカ映画、そして革命」、廣瀬純訳、『現代思想 2002年8月号 特集＝ドゥルーズの哲学』、青土社、2002年、194頁。このインタビューの中でラプージャッドはジェイムズ哲学の実践的性格を論じると共にアメリカ革命の精神としてのプラグマティズムとドゥルーズの思想との関わりを示している。
- ²⁵ 同上、同頁。
- ²⁶ Lapoujade, *op. cit.*, p.47.
- ²⁷ David Lapoujade, “Du champ transcendantal au nomadisme ouvrier William James” , Sous la direction de Eric Alliez, *Gilles Deleuze : une vie philosophique*, Institut Synthélabo, 1998, p.269.
- ²⁸ 植木豊編訳『プラグマティズム古典集成—パース、ジェイムズ、デューイ』、作品社、2014年、430頁。
- ²⁹ Connolly, *op. cit.*, p.78. (杉田、鷗飼、乙部、五野井訳、133頁)
- ³⁰ 同上、132～133頁。
- ³¹ William James, *The Varieties of Religious Experience*, Dover Publications, New York, 2002, (abbr. *VRE*) p.518. (榎田啓三郎訳『宗教的経験の諸相 (下)』、岩波書店<岩波文庫>、1970年、386頁)
- ³² Connolly, *op. cit.*, p.79. (杉田、鷗飼、乙部、五野井訳、135頁)
- ³³ 伊藤邦武『ジェイムズの多元的宇宙論』、岩波書店、2009年、88頁。
- ³⁴ *VRE*, p.512. (榎田訳、378頁)
- ³⁵ *Ibid.*, pp.515-516. (同上、383頁)
- ³⁶ ジャン・ヴァール『形而上学的経験』、久重忠夫訳、理想社、1977年、6～7頁。

A study of ‘becoming’ and ‘faith’ in the philosophy of William James

FUJISAKA, Tasuku

In this paper, we claim that James’s radical experience and pragmatism can be interpreted as theories which are based on his viewpoints of reality and truth.

This interpretation is seemingly primitive. In so doing, however, we will comprehend the terms of ‘becoming’ and ‘faith’ creates his philosophy of life comprehensively.

James believes essence of experience exceeds our formal characterized being. For example, he asserts that life is confused and superabundant, so that we require more of the temperament of life in philosophy. We consider this assertion forms the basis of his thoughts, and we try to find out this point through his thoughts of experience.

James doesn’t explicitly mention the relation between ‘becoming’ and ‘faith,’ so we will consider that not only his thoughts but also the interpretations which is presented by the authors including David Lapoujade and William Connolly.

In the last part of this paper, we will show that ‘faith’ plays an important part in the functions of James’s process philosophy. Finally, we will interpret James’s theory of pragmatism as a basis for his own conception of reality and the concept of becoming as that of truth.